

## 第5章 現在の和歌山と将来



# 復興への息吹と民主主義の広がり

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

### 引きあげ港田辺

太平洋戦争が日本の敗戦で終わったので、海外に出ていた軍人や一般の人々が日本に引きあげてきました。全国18か所の港に引きあげ者を受け入れる地方引揚援護局が開かれ、630万の人々が帰国しました。田辺港もその一つです。



海外引揚者上陸記念碑 (田辺市)

田辺港への最初の引きあげは、1946(昭和21)年2月、台湾から約3,400人の人々でした。その後わずか4か月間に62隻の輸送船が入港し、約22万人の人々と1万1,469柱の遺骨が田辺港に上陸しました。おもに台湾にいた人々で、他に中国、マレーシアなど東南アジアの地域にいた人たちが着の身、着のままで帰ってきました。外地へ移住して、すでに2世、3世となって安定した生活を送っていた人たちは、すべてのものを現地へ残してきたのです。田辺市民は食べ物を用意して温かく迎えました。

軍人・軍属は退職金400円をもらったといいます。しかし、帰国してみれば、米1升200円、物価高でたちまち消えてしまい、その後の生活に苦しみました。

### 民主政治

第二次世界大戦後、**連合軍総司令部**(GHQ)はわが国に政治や思想、言論などの制限を一切廃止するよう指令しました。政治活動が自由になって、多くの政党が活動を再開しました。和歌山県にもその支部が次々にできました。



新憲法公布祝賀行列 (新宮市・昭和21年)

新しい選挙法による衆議院議員の選挙が、1946年4月に実施されました。女性の参政権が認められ、和歌山県下での当選者6人のうち、1人は女性議員でした。1947年5月、日本国憲法が施行され、地

方自治の制度も改められました。知事や市町村長は住民の直接選挙で選ばれるようになりました。女性の参政権ができて初めての投票で、女性は少しとまどいました。そこで、選挙前に投票の練習をしたり、学校で「婦人の投票の仕方」などの講習会を開くほどでした。

こうして、国民は中央や地方の政治に、平等・公平に参加し、国民・住民中心の政治ができるようになりました。

政治のほかに、産業や経済、教育、労働などあらゆる面で、民主主義の考えにもとづく改革がすすみました。

## 六三制教育

教育もすっかり変わりました。アメリカの教育制度を取り入れ、軍国主義の教育から民主主義教育になりました。1947年4月から、国民学校を小学校と改めました。新制中学校をつくり、9か年の義務教育として、男女共学になりました。その翌年に新制高校を設けました。続いて、昭和24年に新制大学を開学させました。

戦争中に焼けた校舎、荒れた学校の建て直しや新制中学校をつくることに各市町村は苦労しました。土地も校舎もないところから建築しなければならなかったからです。完成までに何年もかかりました。その間、分散教室、二部授業など不自由な教育をつづけました。空襲で焼けたため、野外で授業する学校（青空教室）もありました。

学科では、戦争中に重視された修身や地理、歴史をやめて、社会科や家庭科を新しく設け、自由研究を大切にしました。社会科中心の教育を実施する学校もありました。研究発表会を開く学校も多く、新教育の授業を押し進めました。教員も父母もともに新教育に期待をかけ、教育の復興に力を注ぎました。1948年に公選制の教育委員会やPTAも発足し、親と教師が手をたずさえて、子どもの教育を考えることになりました。

## 責善教育

新教育が発足した1947年、差別をなくす教育として 責善教育（後の同和教育）の実践を取り上げようとの主張がとなえられました。和歌山県教職員組合は、県全体の問題として取り上げ、それをすすめるよう県教育委員会に申し入れました。各地の学校でも、責善教育研究会を開いて指導するようになりました。

県教育委員会も新教育のなかで、重要な教育として取り上げ、1950年に「責善教育指導原則（試案）」をつくり、各学校を指導しました。1957年、県教育委員会は「責善教育指導方針（案）」を示し、一層の徹底を図りました。同和地区やいろいろな団体、県民あげての差別をなくす教育や運動に参加しました。

政府も部落解放、人権を守る政治に力を入れるようになりました。和歌山県の責善教育や解放運動が、こうして国を動かす大きな力の一つとなりました。1969年に法律をつくり、同和地区の生活改善や教育の重要性を国民的課題として位置づけました。県ではさらにすすめて、1973年に「和歌山県同和教育方針」を策定しました。

1948年、国連の総会で「世界人権宣言」が採択されました。この地球上からすべての差別や貧困、飢え、病気や戦争をなくそうと誓ったのです。1998（平成10）年は、ちょうどそれから50周年にあたりましたので、和歌山県でも人権問題についてのいろいろな行事を開きました。

## 第5章 現在の和歌山と将来



# 学校制度の改革と教育委員会の設置

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

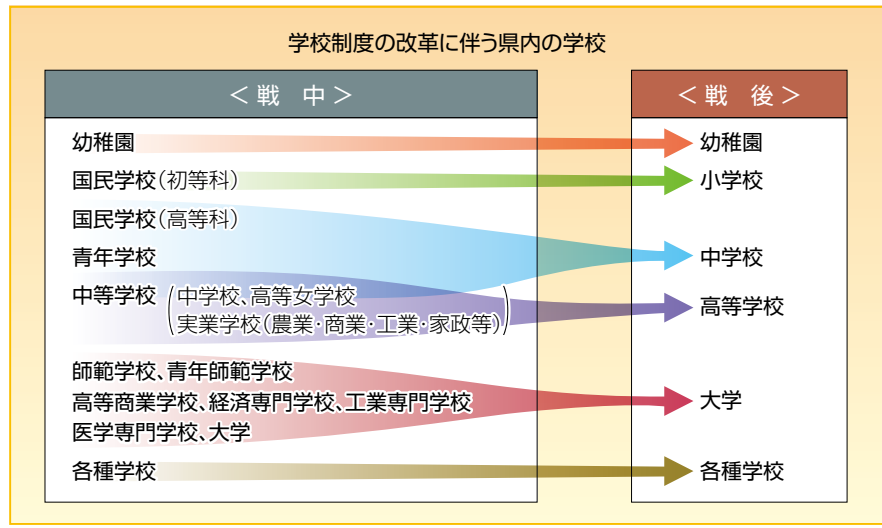
### 義務教育の延長と新制中学校の発足

1945（昭和20）年8月15日の終戦後、ポツダム宣言に基づく戦後改革の1つとして教育制度の改革が行われました。その中心となったのは学校制度の改革で、戦前・戦中の小学校（国民学校）・中学校・青年学校等は廃止されて、小学校・中学校・高等学校等が設置されました。義務教育は国民学校初等科の6年間から小学校6年と中学校3年の9年間に延長されました。戦前には、国民学校初等科を卒業してさらに学校教育を受ける場合、各種学校を除いて、国民学校高等科・青年学校・中学校の3系統に分かれていました。戦後は、中学校卒業後は、同様に各種学校を除いて、高等学校に統一されました。

戦前と区別するために、戦後の中学校と高等学校は「新制」という言葉を付けて呼ばれました。1947年3月に学校教育法が制定され、4月1日から国民学校は小学校となり、新制中学校も発足しました。しかし、準備の時間が足りず、県内の新制中学校では1か月あまり遅れた5月3日の日本国憲法施行日にあわせて、一斉に開校式が行われました。当時、県内の市町村数は206（4市30町172村）で、いくつかの町村が共同で作る組合立中学校もあり、新制中学校の数は195校となりました。

また、新制中学校には校舎がなかったので、大半は小学校の校舎を借りて発足し、3年生までの全員が義務制となる昭和24年度に向けて校舎建築が行われました。しかし、戦後の経済的な混乱の中では建築費の確保が難しく、保護者や生徒、地域の人々による寄附や労力奉仕が行われました。中には、生徒が自分

たちの学校を作ろうと炭の運搬仕事で得たお金を寄附し、それが村の人たちの心を動かして校舎建築が加速されるということもありました。みんなで苦勞して建てた校舎や学校の施設は大切にされ、「下敷きを敷かなくても解答用紙が書ける」というように、ぬか袋で磨き込まれた傷のない木製の机を受け継ぐ学校がかなり後までみられました。



### 新制高等学校の発足

1948年5月10日、県内の新制高等学校21校が開校式をあげました。県内の公私立中等学校の数、戦後にできたものも入れると、中学校11校、高等女学校16校、実業学校30校でした。これらの中等学校は

1948年3月末に廃止され、代わって新制高等学校が設置されましたが、その校数は当初42校の予定でした。しかし、<sup>くんせいぶ</sup>連合国軍政部から新制高等学校の数を減らして、義務制となった新制中学校の充<sup>じゅう</sup>実を図れという<sup>かんこく</sup>勧告が出されて23校に減少となり、さらに4月になって21校での開校が決定されました。また、校名については、地名を使うことが禁止されましたが、地名を用いた方が地域との<sup>れんけい</sup>連携が図れることをねばり強く説明し、「和歌山」以外の地名の使用は認められました。和歌山市内の高等学校は、<sup>かんせき</sup>漢籍などを<sup>てんきよ</sup>典拠として、<sup>こうよう</sup>向陽・<sup>とう</sup>桐蔭・<sup>いん</sup>星林・<sup>せいりん</sup>光風工業（昭和28年度から和歌山工業）と命名されました。



PTAによる運動場整地作業（和歌山市立日進中学校 昭和23年8月）

新制高等学校の設置に際しては、高校3原則と呼ばれた総合制・小学区制・男女共学制の方針がとられました。総合制は、1つの高校に普通科と職業科を設けるというもので、小学区制は通学区域内の生徒をその地域の高等学校に受け入れるため、通学区域の規模をできるだけ小さくするというものでした。男女共学制は、国民学校卒業後に進学できる学校が男女別になっており、教育内容も大きく異なっていたのを是<sup>ぜ</sup>正しようとしたものでした。当初は、共学を心配する意見もあったようですが、和歌山では大きな混乱もなく導入されました。

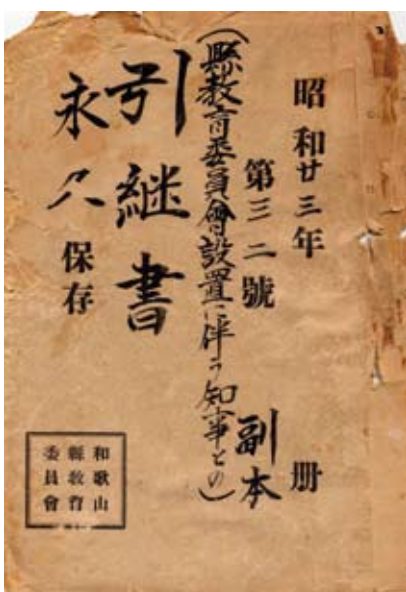
なお、昭和26年度から、桐蔭・星林・海南3高等学校の商業科を廃止して和歌山商業高等学校が設置され、<sup>ふつう</sup>普通科と職業科の分離が行われました。また、1958年には、高等学校の通学区域が小学区制から中学区制に変更され、高校3原則の中では、男女共学制が今も<sup>けいぞく</sup>継続されています。

## 教育委員会の設置

1948（昭和23）年7月に教育委員会法が制定され、都道府県と市町村に教育行政を担当する教育委員会が設置されることとなりました。教育委員会は7人の委員で構成され、内6人は有権者の選挙によって、残る1人は県議会議員の中から県議会によって選ばれることとなりました。都道府県教育委員会委員の選挙は10月5日に行われ、本県では12人の<sup>りつこうほ</sup>立候補者から男性5人と女性1人が選ばれました。

県教育委員会の第1回会議は、1948年11月1日に県庁の会議室で開催されました。招集者である小野知事が「県民の期待に背かざるよう御奮励せられたい」と挨拶し、委員長・副委員長選挙が選出されて知事と<sup>こうたい</sup>交替しました。市町村の教育委員会は、県教育委員会と同様に設置された<sup>しらほま</sup>白浜町教育委員会を除いて、1952年11月に設置され、その数は198（4市28町164村・2組合）委員会となりました。

その後、1956年6月に地方教育行政の組織及び運営に関する法律が制定され、教育委員は公選制から任命制となり、県教育委員会の委員数も7人から5人（平成15年4月から6人）に<sup>へんこう</sup>変更されました。



県教育委員会設置に伴う知事との引継書

### 第5章 現在の和歌山と将来



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	



## 熊野川と紀ノ川の水利用

### 熊野川の電源開発

熊野川の電源開発は、第二次世界大戦後の1951(昭和26)年から1970年ごろまでの約20年間に吉野熊野総合開発事業として実施されました。

この開発計画は、わが国で、最も雨の多い大台ヶ原を中心とした紀伊山地から流れる熊野川と紀ノ川にダムをつくり、水力発電所を建設し農業用水を通して、紀ノ川平野だけでなく、水不足の奈良盆地の水田にも水を流す紀ノ川分水事業がおもなものでした。この計画は1947年に十津川・紀ノ川の総合開発計画としてはじめられました。水力発電・林道の建設・農業用水の確保・洪水の防止

など、さまざまな目的に利用するダムを多目的ダムといいます。この多目的ダムを建設する方法は、1933年のアメリカのTVA(テネシー河谷開発公社)の計画にならったもので、わが国も1950年に国土総合開発法を制定して、21か所の地域で実施されました。そのうち近畿地方では吉野熊野地域だけが指定されたのです。



猿谷ダム(奈良県五條市)

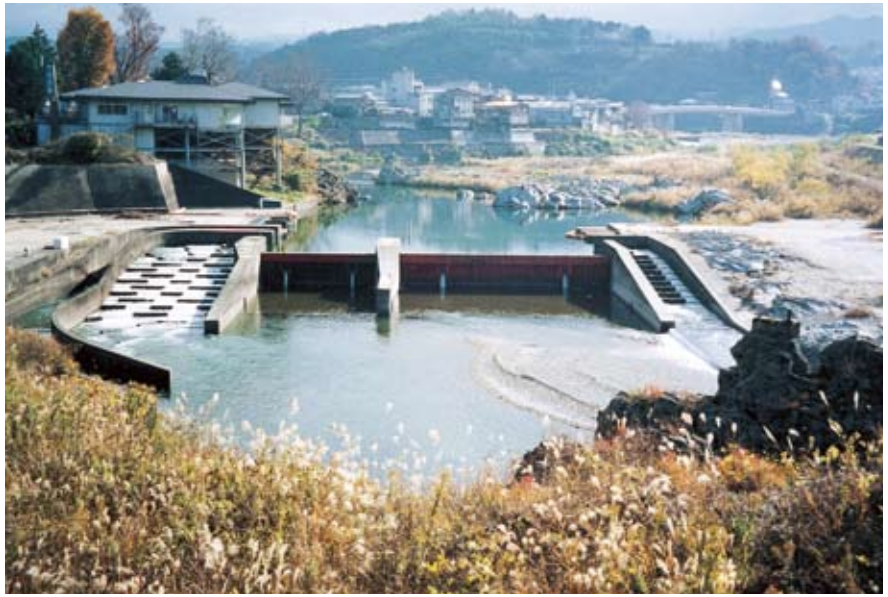
熊野川流域の多目的ダムは、北山川に坂本・池原・七色・小森の4つのダムと十津川に風屋・二津野の2つのダムが建設されました。これらの水力発電所の電力は、主に遠く京阪神地方まで送電線で送られています。



熊野川と紀ノ川の総合開発

## 紀ノ川の分水事業

この事業は吉野川の水を奈良盆地の農業用水に利用しようとする内容です。もともと大台ヶ原から流れる紀ノ川は、下流の紀ノ川流域の水田を養ってきました。紀ノ川流域の人々にとっては命の水であったのです。そのため、紀ノ川流域の人々は昔からの用水の権利があると反対が強く、このような計画は、江戸時代から何度も試みられましたが実施できませんでした。



下淵頭首工 (奈良県大淀町)

1950年から1954年にかけて和歌山・奈良両県の話し合いがつづけられ、その結果、太平洋へ流れる十津川の水を紀ノ川に流して、紀ノ川平野と奈良盆地の水田を養うことで話し合いがまとまりました。



大滝ダム (奈良県川上村)

大台ヶ原から流れる吉野川に大迫ダムと津風呂ダムが建設され、奈良県吉野郡大淀町下淵から奈良盆地の東の山麓と西の金剛山地の麓に幹線水路を引き、その幹線水路より低いところにある平野の約10,320haの水田や畑を灌漑しています。一方、五條市西吉野で取水された紀の川用水は紀ノ川北岸だけではなく、一部南岸の丘陵にある田畑を灌漑するのに大変役立っています。また、2003（平成15）年には紀ノ川の洪水調節を主な目的とする大滝ダムが上流に、さらに同じ年には紀ノ川の河口に近い新六箇頭首工にかわって、新しい紀の川大堰の本体が完成し、将来は大阪府への分水が予定されています。



紀の川大堰 (和歌山市)

第5章 現在の和歌山と将来



# 高度経済成長と工業の発展

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

## 成り立ちと成長

紀ノ川の河口から有田川河口までの沿岸は、紀伊水道に面しており、しかも阪神工業地帯に近いところにあります。この地域は、昔から木材工業や繊維工業などが発達していました。第二次世界大戦前から大戦中にかけて、政府の軍需産業をより盛んにするため、各地方都市へも工場が建てられるようになり、この政策にもとづいて、和歌山県へも軍需産業が進出してきました。紀ノ川河口は鉄鋼業と化学工業が、また南部の下津湾へは石油精製工場が建設されました。こうして県の北部臨海地域の工業地帯がつけられました。

第二次世界大戦後になって、工業地帯はさらに大きく発展しました。1960（昭和35）年ごろからの高度経済成長期を中心に、約700haの工業用地が造成されました。そして、各工場とも大型専用船が入港できるように整えられました。製鉄所へは、鉄鉱石と石炭がオーストラリアなどから、また石油工場へは、原油がアラブ首長国連邦などから、それぞれ輸入され、製品は主として日本国内で販売されましたが、その後、外国へも輸出されています。

## 紀ノ川河口の工業

1942年に河口の北岸に建設された製鉄工場は、軍の管理のもとに鋼管から兵器用の部品などをつくりました。第二次世界大戦後も生産を再開して鋼管の生産を開始しました。1961年に製鉄用高炉が完成しました。その後次々と高炉が建設され、1969年には第5号炉が完成して、鉄鋼の1年間の生産量は922万tという世界的な工場に発展しました。ところが、この会社は、生産部門を鹿島（茨城県）へ移したので、ここでの鉄鋼生産は大きく減ってしまいました。しかし、和歌山の工場は新しい油田を開発するのに必要なシームレスパイプの生産で実績をのぼし、その生産拠点として世界中から注目されています。2009（平成21）年には新しい高炉も完成する予定で、鉄鋼の増産をめざしています。



紀ノ川河口にある製鉄工場（和歌山市）

1942年に河口南岸に建設された化学工場は、戦争中の石油不足の対策として、東南アジア方面のヤシ油から航空機の潤滑油をつくる研究と製造を行っていました。第二次世界大戦後は、石鹼や頭髪油などの生産に切りかえ、現在は家庭用石鹼・シャンプー・洗剤や化学製品をつくっています。

\*1 継ぎ目のないパイプで、溶鉱炉でできた厚い鉄をそのまま丸パイプにしたもの。

また、水軒沖を埋め立て、1967年に木材工業団地が、1997年には金属機械工業団地が建設されました。

## 下津湾の工業

日中戦争が長引くことが予想されていたので、昭和初期に不振になった木材工場や貯木場の跡地の利用に着眼して、深くて波の静かな下津湾には精油会社が進出しました。1938年に湾の北岸に大規模な製油施設がつけられました。翌年には、下津湾の南側、山一つ隔てた椒村（有田市初島）の砂浜にも石油工場が建設されました。トンネルで下津港と工場を結



有田市にある石油精製工場

んで油送管を通し石油精製を開始しました。しかし、この両工場は、第二次世界大戦末期にはアメリカ空軍の爆撃を受けて両工場とも生産ができなくなりました。

第二次世界大戦後精油を再開し、下津湾の南北両岸の2つの石油会社とも新しい精油機械を整えました。原油を積んだ大型のタンカーが着岸できる棧橋もつぐられ、南岸の工場では、アメリカの石油会社から原油を購入して、製品の販売はアメリカの会社を通して行っています。1960年ごろから海岸の埋め立てにより工場敷地も広げ、オートメーション化した大製油所に変身しました。その後北岸の石油会社は、経営不振から工場を撤退しました。南岸の石油会社は、1日に約17万バレルの石油精製能力をもっており、製品はガソリンや灯油などで、船舶やタンクローリーで国内の市場へ販売されています。

1960年代になってからは、黒江湾の埋立てがはじまり、石油精製・鉄鋼の両会社と火力発電所がつけられました。このうち鉄鋼会社は、1966年に鋼管専用の工場が、1973年に火力発電所が操業を開始して工場地帯をつくっています。

また、1985年には御坊市の日高川河口南岸でも海岸を埋め立てて、火力発電所が建設され、その電力のほとんどは阪神地方へ送られています。

## 大気汚染とその対策

石油や石炭を多く使う北部臨海工業地帯では、1960年代になって工場の生産が増えるにともない、大気汚染などの公害が多くなってきました。公害をなくす住民運動も活発になり、1967年に県庁に公害対策室（現在の地域環境課）が設けられました。大気汚染を防ぐ法律などによって空気の汚れの様子を常時監視するようになりました。また2000年には、常時測定局を設置していない地域の大气調査をするため環境測定車「ブルースカイ21」を走らせています。この監視は、和歌山市から田辺市までの広い地域で行われ、大気汚染が多くなったときに注意報などを出すようになっていました。その結果今は、おおむね良好な大気環境が保たれています。



大気汚染常時監視網（2008年）

\* 1 1バレルは約160リットル弱にあたる。



# 第5章 現在の和歌山と将来



## 新しい農業をめざして

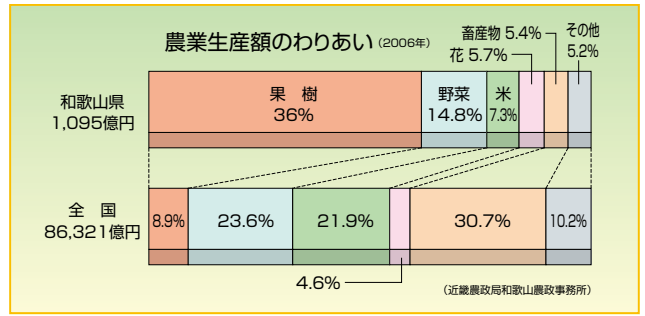
時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

### 農業のようす

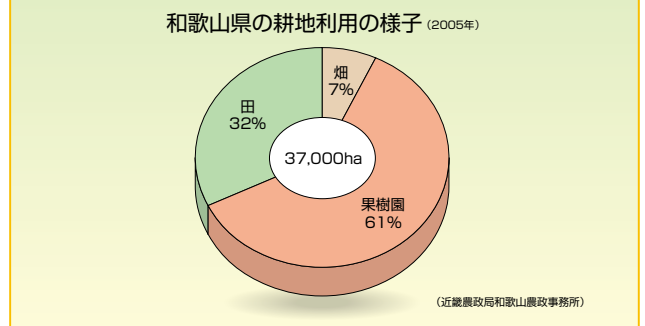
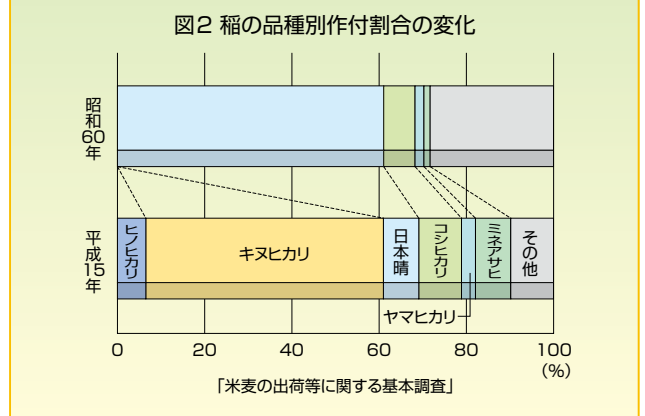
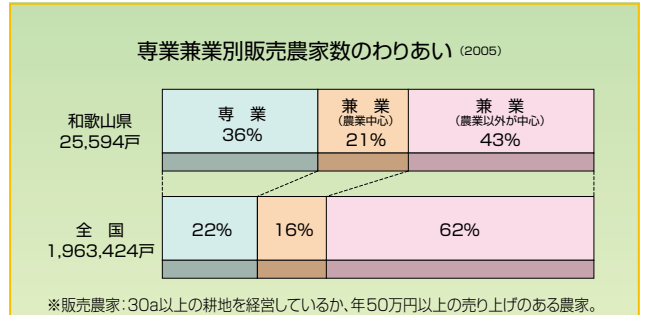
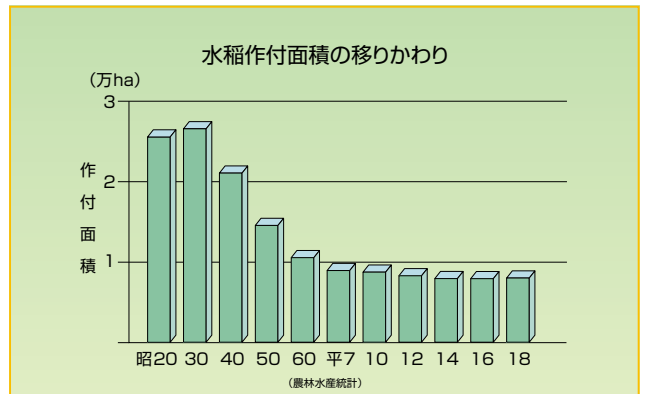
和歌山県の総農家数は36,531戸、そのうちの70%が販売農家で、その割合はどちらも全国の約1%にあたります。販売農家のうち約半数の家が農業収入で生計をたてています。農業就業者数は51,218人で県全体の約11%を占め、農業は和歌山県にとって主要な産業のひとつです。

和歌山県では果樹の生産額は農産物全体の約60%となっていて、全国果樹産額の約9%を占めています。和歌山県の農業は、大消費地である京阪神に近いという恵まれた立地条件と温暖な気象条件を活かして、果樹等の園芸作物を中心にさまざまな種類の作物を栽培しているのです。

和歌山県の耕地面積は、総面積(4,726km<sup>2</sup>)の約8%ですが、耕地面積あたりの収入をみると全国平均と比べて約2倍の収入をあげていて、土地集約型の農業が行われていることがわかります。



日本の農業は日本人の主食である米づくりが基本です。和歌山県でも第二次世界大戦後、水田によい土をいれたり、排水をよくしたり、米の品種改良や機械化をはかり増産に励みました。しかし、食生活



\* 1 2005 (平成17) 年 農林業センサス。



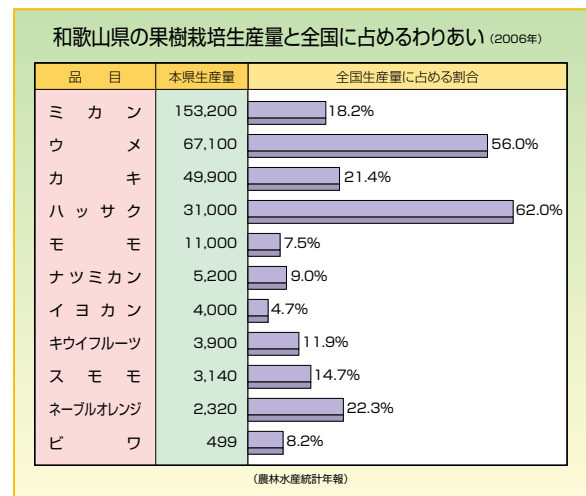
水田から転換した畑（和歌山市）

の変化により米の消費が減るようになってきたので、もうけの多い果樹や野菜・花卉の栽培に転換する農家が多くなっています。そのため水田の作付面積が減少し、2000（平成12）年頃からは1955（昭和30）年頃の3分の1になっています。また、品種も「日本晴」に代わり、味のよい極早生の「キヌヒカリ」や晩生の「ヒノヒカリ」の作付けに替わってきています。

## 果樹王国

和歌山県は耕地が少ないので、山あいの傾斜地を活かした果樹栽培が早くからさかんでした。1970年の農業政策の転換で、今まで米作りをしていた水田が少しずつ果樹園に変わり、平地にも樹園地がふえてきました。そしてそれぞれの地域の気象条件等を考えて、いろいろな種類の果樹が集約的に栽培されています。

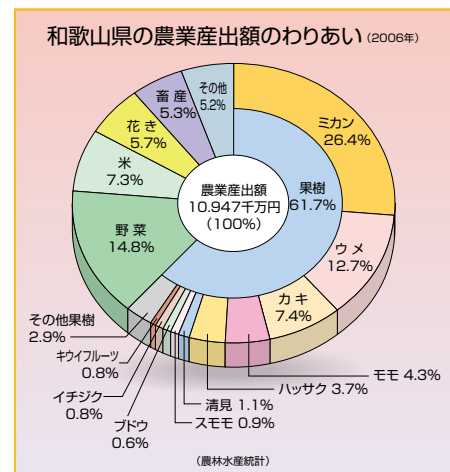
果樹の生産量をみると、ミカン・カキは全国の約2割、ウメ・ハッサクは約6割を占めています。ほかにモモ・ナツミカン・イヨカン・キウイフルーツ・スモモ・ネーブルオレンジ・ビワなども高い生産量をほこっており、県の農業産出額の約6割を果樹が占めていて、まさに果樹王国和歌山と呼ぶことができます。



## 将来にむけて

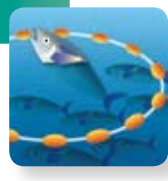
和歌山県の農業就業人口は減ってきており、そのうえ65才以上の割合が多くなって農業の担い手不足が予測されています。農業人口を確保するには、農業を続けていくための安定した収入が見込まれることが必要です。そこで和歌山県では新しく農業を始めようとする人を支援したり、農家の人が作った農作物を会社に売るように契約することを手伝ったりするなどの取り組みをはじめています。また、土を使わず溶液で栽培する方法やできるだけ農薬を使わない環境にやさしい農業をするための研究も進められていて、米作りでは2006年に奨励品種として今までよりさらに品質のよい「イクヒカリ」が選ばれました。

ミカンやウメ、カキなどは栽培面積の約55%が傾斜地にあり、これからは果樹園内に道路を作り、消毒や水やりの機械化などを進めて働きやすくなるようにしようとしています。また果樹は海外からの需要も多くなり、海外への輸出による発展が期待されています。



\* 1 実るまでの成長が大変早く、約100日で刈り取ることができる。

# 第5章 現在の和歌山と将来



## 海の幸を追って

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

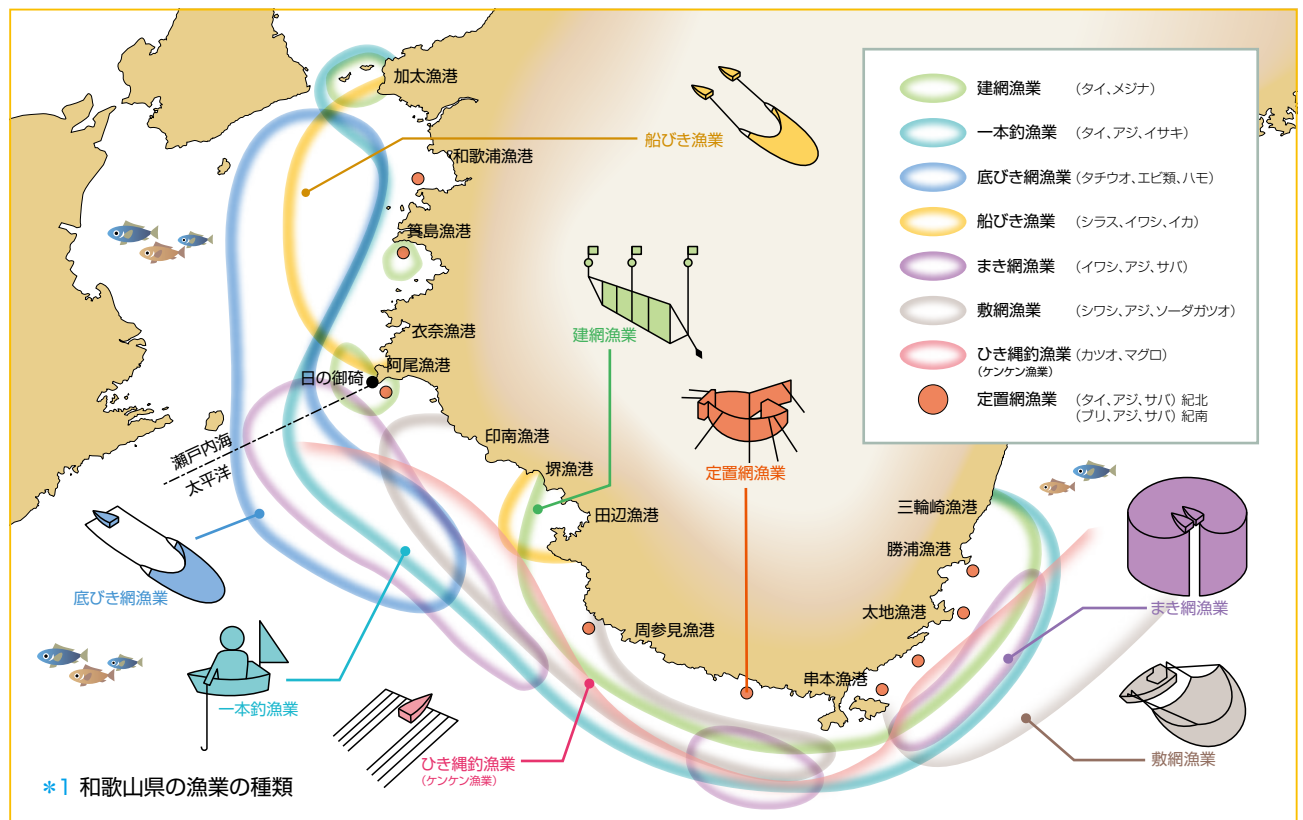
### 漁業の発達

1960年代に入って、日本経済は <sup>こうけいき</sup>好景気がつづき、人々の生活も豊かになり、魚を食べる量も増えました。魚の値段も次第に上がり、水産業にたずさわる人々も漁業の発展に熱が入るようになりました。

魚網はそれまでの綿糸から化学繊維に変わり、漁船も木造船から軽い材料でつくり、燃料が少なくすむエンジンを使ったFRP船(強化プラスチック船)に変わりました。そのため、網干しや船の手入れも手間がかからなくなりました。魚群探知機もでき、より正確に魚群の量や種類まで予想できるようになりました。約600kmにおよぶ海岸線のつづく和歌山県の海では、こうした新しい設備の漁船と漁具によっていろいろな漁業が営まれています。

このように漁業の仕事は楽になりましたが、たくさんの資金がかかります。また年々漁獲量が少なくなっているのが気になります。

勝浦港は全国でも指折りのマグロ漁業の基地です。漁場に近いたことがマグロ基地に発展した理由といわれます。1960年代に、マグロ漁が盛んになってから勝浦港は活気を帯びてきました。そうしたところからマグロは和歌山県の魚に指定されています。



\*1 和歌山県の漁業の種類

\*1 和歌山県農林水産部水産局「和歌山の水産」「目で見る和歌山の漁業」(2008年)から作成。

勝浦港に水揚げするマグロは、生マグロとマイナス40～50度に凍らせて運んでくる遠洋漁業の冷凍マグロがあります。マグロはさしみやすしに人気のある高級魚ですから、水揚げが少なくなることは勝浦港の繁栄に大きな影響があります。また交通事情の改善と消費地の拡大が課題です。

## 沿岸埋立て・養殖

日本にはいろいろな遠洋漁業があり、かつては南極海（南氷洋）をはじめ世界の各海域へ進出しましたが、世界的な商業捕鯨の禁止や経済水域200海里のような規制が強まり、遠洋漁業の比率は下がりました。

1960年代から日本の工業が発展し、全国的に臨海や内陸の工業化・都市化が進み、和歌山県でも海を埋め立てて工業用地をつくりました。そのため土砂や汚水が流れて海が汚れ、漁場が少なくなりました。藻場（海中林ともいう）は、カジメ・ホンダワラなどの海藻の多いところで、魚の稚魚の生育場になり、海をきれいにする作用があります。

また、江戸時代から知られていた魚を集める魚付林も大切です。今も県内には15市町の沿岸や島に魚付保安林があります。魚のえさになるプランクトンや海藻の栄養分は、川から流れこむ森の腐植土の養分です。魚が育つ海にするには豊かな陸の緑がかかせないので、全国的に漁業協同組合と森林組合が協力して、積極的に植林をすすめています。

一方、稚魚を放流したり、海底に人工磯を築いて藻場を増やしたりしています。和歌山県では、紀北の瀬戸内海で、ワカメ・タイ・ヒラメ・ハマチの養殖が行われています。田辺湾から串本・勝浦にかけての太平洋南区では、タイが養殖されていますが、近年一部の漁港ではマグロが養殖されています。水産試験場、栽培漁業センターなどでは増殖の研究をし、漁業協同組合を経て、漁師の人々によって沿岸各地に稚魚を放流して増殖がはかられています。

赤潮の発生は近年少なくなりました。赤潮の研究が進み、赤潮はリンやチッソが大量に増え、日照や温度の上昇が作用して発生することがわかってきたのです。海の環境をよくしようとするみんなの努力が実ってきました。



太地町立くじらの博物館

## 捕鯨

太地の漁業者は、かつて捕鯨船に乗り組んで南氷洋をはじめ、世界の各海域へ出漁していました。一番盛んであったのは1955（昭和30）年ごろで、20,000 t級の巨大な母船が十数隻のキャッチボート（捕鯨船）とともに、大船団で出漁しました。やがて船団の規模も小さくなり、1980年代には母船と捕鯨船4隻ぐらいになりました。

大型の沿岸捕鯨は1987年まで行われ、マッコウ鯨やニタリ鯨など大型の鯨を捕らえていました。小型沿岸捕鯨は50 t未満の小型捕鯨船で、ミンク鯨・ゴンドウ鯨など小型の鯨を捕らえます。ミンク鯨も1987年を最後にIWC（国際捕鯨委員会）によって禁止され、現在ではゴンドウ鯨などを、限られた数だけ捕らえています。

日本では昔から「鯨一頭、七浦うるおす」といわれるくらい、鯨の肉・皮脂・内臓・ひげなどあらゆる部分を利用してきました。全国には鯨や魚に感謝し、その霊をなぐさめるための鯨塚や魚類供養碑がたくさん建てられています。太地でも毎年4月に供養祭がもよおされています。串本町大島にも弔鯨塔がありますが、紀州漁業者のやさしい心がしのばれます。

\* 1 1海里は1.852m。

\* 2 魚類を集め、またその繁殖・保護をはかる目的で設けた海岸林。

\* 3 人工的に孵化した稚魚を海面に放流し、これらが成長したあと再捕獲する漁業。

### 第5章 現在の和歌山と将来

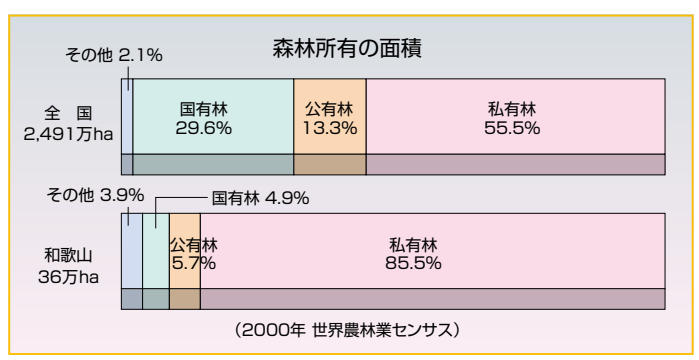


## 紀伊山地の森林と生活

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

### ゆたかな紀州の森林

紀州は「木の国」です。山地が多く温暖で雨量の多い和歌山県は、県全体の77%（全国平均66%）が森林におおわれています。紀伊山地では、寒い東北地方を代表するブナなどの落葉広葉樹や、暖かい太平洋側を代表するカシ・クスなどの常緑広葉樹が見られ、ゆたかな森林が広がっています。



紀伊山地のブナ林は、紀州の屋根といわれる護摩壇山（1,382m）から大塔山（1,122m）にかけて分布しています。また高野山の900m前後の山には、コウヤマキ・モミ・ツガなどの針葉樹が見られます。これより低い山地には、カシ・クスなどの暖帯林が広く分布しています。また、紀伊山地の内陸から海岸にかけてはウバメガシ、さらに紀伊水道の海岸にはアコウが見られます。このように紀伊山地の森林は温帯から温暖帯までのさまざまな種類の樹木が分布しています。また、雨の多い南部の渓谷では夏でも涼しく低地で高山植物のシクナゲもみられます。

### 山に生きる人々

和歌山県の森林の特徴は、天然林よりスギ・ヒノキの人工林が多く、また国有林が少なく私有林が森林面積の86%にもなっていることです。また、その私有林をもっているのは、少数の山林地主で、30ha以上の山を持っている山林地主が、県全体の森林面積の46%を占めています。



紀伊山地の森林

大きな山林地主は「山番」をおいて広い山林を管理し経営しています。山の木を育てるには植林したあと、下刈り・枝打ち・間伐と長い年月が必要です。山林地主の山から木を買って、切り出すのが素材生産業者です。今では仕事も機械化され、チェーンソーで伐採された原木は集材機で集められ、トラックで新宮や本宮・田辺・龍神・御坊などの原木市場に運ばれています。明治の中ごろから新宮や古座、御坊、和

\*1 2002(平成14)年現在(林野庁「森林資源現況」)全国第6位。  
\*2 クワ科の常緑樹で、由良・日高・美浜の三町では県指定の天然記念物になっている。



古座川上流のヒノキ林



機械化された木材の輸送

歌山などの河口の町は木材の集散地として栄え、機械を使った製材工場ができていましたが、1965（昭和40）年ごろから、日本の経済が大きく成長し、好景気にささえられて、外国からの木材が輸入されるようになると、外材を輸入できる和歌山や田辺・新宮などの港に、外材を製材する工場がふえました。しかし一方で、安い外材が入るために、国内の木材で発展してきた古座や日置などの木材集散地がおとろえてきました。

同時に紀州材の生産も不振となり、1955年に約1万4,000人もいた県内の林業従事者は、2005（平成17）年には、約1,000人余に減少しました。

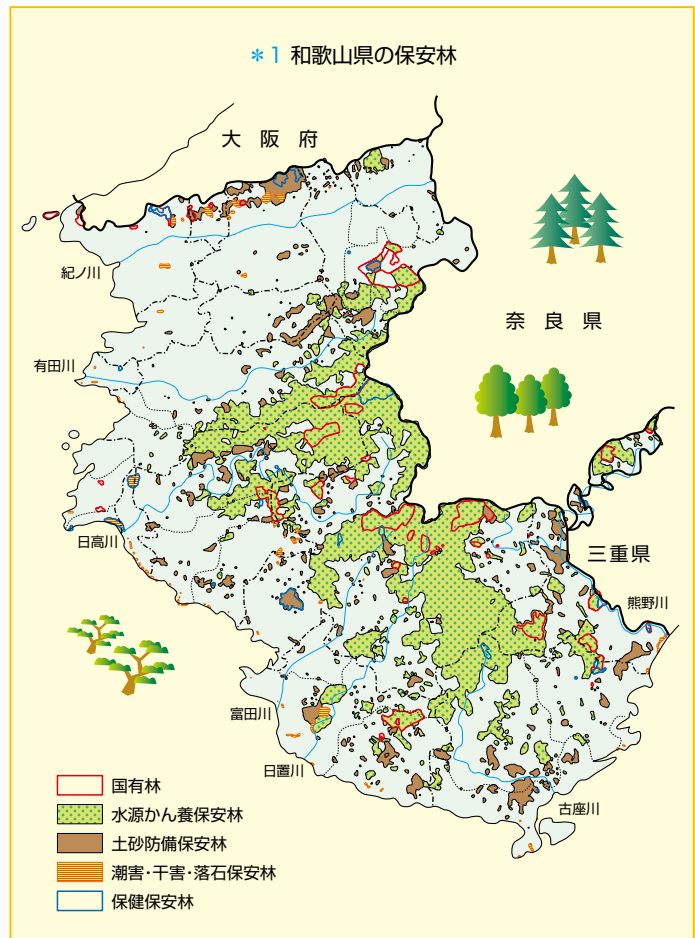
しかし、和歌山県は、2002（平成14）年から緑の雇用事業を展開し、2006年度末に新しい林業の担い手が260名もふえました。森林整備は大変な作業ですが、若手林業従事者の確保によって県の財産は維持されています。

## 森林保護の大切さ

今、地球の環境破壊が心配されるようになって、広葉樹を含む本来の森林の大切さが見直されています。森林は、木材を生産するだけでなく、水源ともなり、山崩れや洪水を防止したり、空気を浄化したり、お金でははかれない価値があります。森林は心をいやす場所でもあります。教育や文化、レクリエーションの場でもあります。世界の森林破壊が急速に進むなか、21世紀には森林は貴重な財産になります。ふるさとの森林は世界の財産です。森林をどう守るか、都会の人々に森の良さをどう伝えていくか、身近で大きな課題です。



保健保安林（護摩壇山）



\*1 保安林の制度は、1897（明治30）年の森林法で定められ、その後改正されてきている。

第5章 現在の和歌山と将来



# 国際化をめざして



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

和歌山県は、明治時代から海外への移民や漁民の出稼かせぎが有名ですが、和歌山の技術が生んだ綿ネル・特殊織物とくしゅおりのもの（パイル）・貝ボタン・蚊取り線香などの工業も、原料の輸入や商品の輸出など海外貿易と結びついて発展してきました。

現在も和歌山県にはいろいろな研究者や発明家が努力をかさねて世界を舞台かつやくに活躍しています。

## 写真現像

カラー写真がはじめて出てきたころは、現像げんぞう焼きつけは1週間もかかりました。それが、今は1時間足らずでできます。1976（昭和51）年、和歌山県内の会社が、カラー写真が45分でできる「QSS」（クイック・サービス・システム）を完成させました。それをナイアガラたきの滝の売店へQSSを設置して観光客に「1時間で写真ができあがります」と呼びかけたところ非常に好評となり、QSSは全世界へ広がっていきました。



写真処理機器

デジタルカメラふききうの普及にともない現在QSSは、あらゆるデジタルカメラから直接カラー写真をプリントすることができるような、デジタル化時代に対応した製品に進化しています。

また最近では、これまでのQSSに比べてコンパクトで環境にも配慮はいりよしたインクジェット方式のカラー写真のプリンターを開発して、全世界で注目をあびています。

## コンピュータ横編機

セーターやカーディガンなどのニット製品は“世界の工場”中国で製造されることがほとんどですが、その編機あみを開発、製造するメーカーが和歌山市にあります。元々は軍手などを編む手袋編み機からスタートしましたが、1978年にコンピュータで作動する横編機の開発に成功しました。デザイナーが柄や形をコンピュータの画面上で作成し、そのデータをもとに編み上げることができるもので、今や横編み機の製造では世界No1きぎうの企業に成長しました。近年では脇やそでなどに縫い目がないため、軽くて着ごちのよいセーターが編める編み機\*1を実用化し、世界のアパレル産業から注目されています。



コンピュータ横編機

\*1 衣服（既製服）のこと。

## 精米機

和歌山県内の 精米機製造会社では、米の中の小石を自動的に取り除く方法はないものかと考え、1961年、ついに「石抜き撰穀機」を作ることになりました。

その後も次々に新しい機械を創り出し、1991（平成3）年には「お米の革命」といわれる「BG精米法」（Bran Grind＝ぬかをけずりとる）の開発に成功しました。これは普通の白米についているぬかを、米ぬかを使って取り除く方法で、「BG米」とか、「無洗米」とよばれています。米をとぐ必要がないので、河川を汚さず、環境保全にも役立っています。

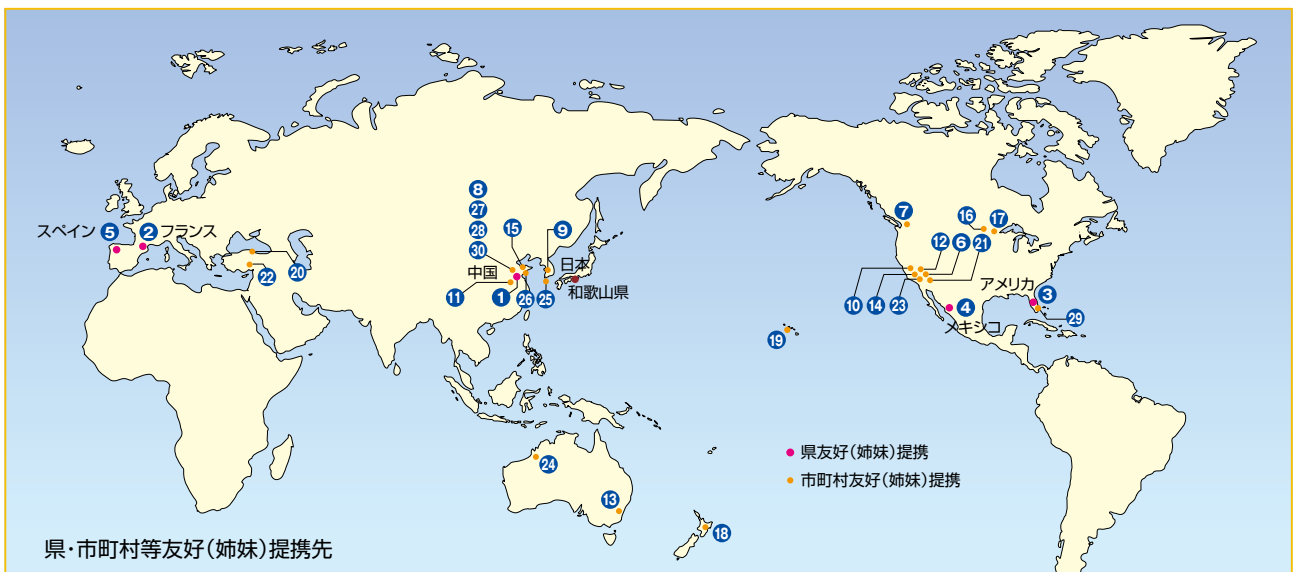
近年、栄養とおいしさを両立した健康志向のお米「金芽米」を開発して、注目をあびています。



精米機

## 国際友好都市

和歌山県と県内の各市町村や国公立大学は、外国の人々やその国の文化を理解するため、外国の都市などと協定を結び、交流しながら友好を深めています。その友好都市などは次のとおりです。



県・市町村等友好(姉妹)提携先

No.	市町村名等	提携都市(州)等	所在国(州)
1	和歌山県	山東省	中国
2	和歌山県	ピレネーオリアンタル県	フランス
3	和歌山県	フロリダ州	アメリカ
4	和歌山県	シナロア州	メキシコ
5	和歌山県	ガリシア州(サンティアゴへの道)	スペイン
6	和歌山市	ペーカースフィールド市	アメリカ(カリフォルニア)
7	和歌山市	リッチモンド市	カナダ(ブリティッシュ・コロンビア州)
8	和歌山市	済南市	中国(山東省)
9	和歌山市	済州市	韓国(済州道)
10	橋本市	ロナパーク市	アメリカ(カリフォルニア)
11	橋本市	泰安市	中国(山東省)
12	有田市	デレン市	アメリカ(カリフォルニア)
13	田辺市	ワイオン市	オーストラリア(ニュー・サウス・ウェールズ州)
14	新宮市	サンタクルース市	アメリカ(カリフォルニア)
15	かつらぎ町	萊西市	中国(山東省)

No.	市町村名等	提携都市(州)等	所在国(州)
16	湯浅町	ケンブリッジ市	アメリカ(ミネソタ)
17	湯浅町	ブラハム市	アメリカ(ミネソタ)
18	湯浅町	ケリケリ町	ニュージーランド(リースランド・ファーノース)
19	白浜町	ホノルル市(ワイキキビーチ)	アメリカ(ハワイ)
20	串本町	ヤカケント町	トルコ
21	串本町	ヘメット町	アメリカ(カリフォルニア)
22	串本町	メルシン市	トルコ
23	那智勝浦町	モントレイパーク市	アメリカ(カリフォルニア)
24	太地町	ブルーム市	オーストラリア(西オーストラリア州)
25	那賀郡町村会	南済州郡	韓国
26	和歌山下津港	青島港	中国(山東省)
27	和歌山立医大	山東大学	中国(山東省)
28	和歌山大学	山東師範大学	中国(山東省)
29	和歌山大学	西フロリダ大学	アメリカ(フロリダ州)
30	和歌山大学	山東大学	中国(山東省)



第5章 現在の和歌山と将来



# くらしの中の伝統産業

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

私たちの身近なところで伝統産業が生まれ、くらしを便利で快適なものにしています。

## 綿ネル業

綿ネル<sup>たんじょう</sup> 誕生のきっかけは、1869（明治2）年の和歌山藩<sup>はん</sup>の兵制改革です。工夫を重ね伝統の紋羽織<sup>もんぼおり</sup>から「洋品フランネル」をまねた「紀州ネル」をつくり軍服としました。これは各地の軍隊にも採用され、紀州ネルは綿ネルの代表となり主要産地となりました。さらにその生産を通して、スフ・メリヤス・ニット（ジャージ）、紡績<sup>ぼうせき</sup>・織物<sup>ほうせい</sup>・縫製<sup>なつせん</sup>、捺染<sup>せんしよく</sup>、染色化学、捺染機械<sup>あみき</sup>・編機<sup>せんい</sup>の製造などの繊維関連産業が、和歌山市を中心に県内各地に生まれ発展し、現在も繊維工業は和歌山県を代表する産業のひとつとなっています。

## パイル（シール）織物

パイル織物とは、織物の表に短い糸を織り出した織物で、そのうちアザラシの皮のようになめらかなものをシール織物といい、橋本市高野口町など伊都地方で多く生産され、全国シェアの80%以上を占めたこともあります。「川上木綿<sup>かわかきもめん</sup>」の産地でしたから、綿ネルを経て、再織<sup>さいおり</sup>をつくり出しました。再織は芸術的な要素があるものの量産できず、大正時代にパイル（シール）織物が機械化され産地に発展しました。



パイルの織機（橋本市高野口町）

高度経済成長期には技術革新が進み、素材も木綿に加えてアクリルなどの合成繊維<sup>せんい</sup>を用い、衣料・毛布・モケット（電車の座席用<sup>ざせき</sup>）・カーテン・ぬいぐるみ用生地などのほか、1975（昭和50）年以降は自動車のシート生地が過半を占めました。モケットは今も新幹線<sup>しんかんせん</sup>や観光バスの座席用生地として使われています。近年、安価な輸入品もあり厳しい状況ですが、再織製織技術の近代化に取り組み、コンピュータで作動するモダンなテクノテキスタイルモール（再織＝彩織）が誕生し、新たな展開がすすめられようとしています。

## 皮革業

和歌山市の皮革業<sup>ひかく</sup>は武具として利用された江戸時代初めにさかのぼりますが、明治初期の和歌山藩の兵制改革が転機<sup>かわざいくし</sup>となりました。革細工師をドイツから招き革製作伝習所<sup>まね</sup>を開き、製革<sup>せいかく</sup>・製靴工業<sup>せいかく</sup>の基礎がつくられました。廃藩後<sup>はいはんご</sup>は個人が経営するようになりますが、1873年に名古屋<sup>なごや</sup>と広島<sup>ひろしま</sup>の陸軍の軍需品<sup>ぐんじゆひん</sup>を引き受けるなど産地となっていきました。第二次世界大戦後は民需品<sup>みんじゆひん</sup>生産に切り替え、1972年ごろから、近代化、合理化<sup>はか</sup>を図り品質も世界水準に達する一次製品（中間品<sup>きょうぎひん</sup>）の供給地となりましたが、合成皮革とバッグなどの輸入製品の増加などにより生産量は減少しています。

\* 1 いったん織りあげた布を切断し、撚りかけてモール状の糸として再び編って製品にする。

## 家庭用品

キッチン・バス・トイレなどで使われる家庭用品が海南市と紀美野町で多く生産されています。商品の種類は3,000以上もあり出荷額は約516億円(2004年度)といわれ、全国生産の約80%以上を占めて日本一となっています。

家庭用品の原料はシュロでした。水に強いので重宝され、明治時代には農漁業用・軍需用などの縄・綱・網などが生産され、大正時代には製縄機などの改良があり、業者が販路を大きく広げました。その後、原料にパーム(ヤシ)の実の繊維やマニラ麻などを輸入し、ほうき・たわし・ブラシ・マットなどが広く生産されていきました。

高度経済成長期には、ビニロン・プラスチック・発泡ウレタンなどの化学素材に変わり、機械化により大量生産がすすみました。スーパーマーケットなどができ、流通・販売面での変化もありました。さらに、住宅の洋風化により新しい商品が開発され、また自動車用品も生産されるようになりました。

近年は中国など海外に生産拠点を移すメーカーも増え、安価な外国産商品の輸入増により国際的な競争時代に入りましたが、地球環境や高齢化社会を考え、自然に還る素材など環境と人にやさしい製品の開発に努めています。



家庭用品(海南市)

## 紀州漆器

海南市黒江で中心に生産されている紀州漆器(黒江漆器)のうち伝統的な盆・椀などの木製漆器は国の「伝統工芸品」に指定されていますが、高度経済成長期から、素材はプラスチックなどに、塗料は漆・カシューなどから化学塗料に、技法も塗りから吹付けが主となりました。鏡類・状差し・花びん・花びん台・雛人形などの室内装飾品が増え、最近ではリモコンラックなどが生産されています。



紀州漆器(海南市)

国内四大生産地の一つに数えられていますが、厳しい状況にあります。西洋機に漆風の塗りをほどこした試作品や、漆器まつりにも衝立・大雛人形や漆風の塗りをほどこした郵便ポスト・自動車・原付自転車などを製作し展示するなどして、各種の製品をつくる新しい取り組みが続けられています。

## 醤油

醤油は肉料理をはじめ各国の料理に使用されるなど、その風味は世界に広まりつつありますが、大手の業者が業界を圧倒しています。しかし、県内には湯浅を中心に約20の醸造元があり、それぞれが独自の製造方法で天然醸造の伝統を守り、「手造り醤油」として全国的に静かなブームを呼んでいます。

これらの伝統産業も流行や景気の波があり、近年は国際競争も激しく、経営は厳しくなっています。しかし産地では国内や海外の消費者の気持ちをよくつかみ、今まで身につけた技術を生かして、デザインやファッション性に優れた新商品の開発に懸命の努力をしています。また、環境にやさしい製品の開発もすすめられています。

\*1 ウルシ科の常緑喬木で、樹脂を塗料やゴムなどに使う。化学塗料の名前にも使われている。

# 第5章 現在の和歌山と将来



## 交通の発展

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

### 道路交通の発展

和歌山県は、太平洋に大きく突き出した紀伊半島に位置しており、また紀伊山地が半島全体にひろがっています。その山並みが交通の発展をさまたげてきました。そのため、日本各地域と行き来するための道路を整えることが重要でした。

近畿自動車道紀勢線は、大阪府松原市を起点として、和歌山市および田辺市を経由し三重県多気町に至る延長336kmの高速自動車国道です。そのうち近畿自動車道が2007(平成19)年に田辺 I C<sup>\*1</sup>まで開通し、海南 I Cと有田 I C間では片側2車線化のための新しいトンネル工事が進められています。また紀南では那智勝浦町と新宮市を結ぶ那智勝浦新宮道路が開通しました。

京奈和自動車道は京都、奈良、和歌山を結ぶ延長120kmの幹線道路として計画され、各府県でそれぞれ工事が進められていますが、和歌山県では2007年から高野口インターチェンジから奈良県五條市まで通行できるようになりました。

1980(昭和55)年に開通した高野龍神スカイラインは2003年に無料化され、一般国道371号線として和歌山県の尾根を通り橋本市から田辺市龍神を経由して新宮市を結ぶ道路として利用されています。この



湯浅御坊道路



那智勝浦新宮道路

他に紀伊半島を一周する国道42号線や奈良県五條市から新宮市を南北に通る国道168号線が通じています。

これらの南北に結ぶ3つの国道と近畿自動車道と東西に結ぶ五つの国道が、紀伊山地の交通網として整備されてきています。これらの国道は県道や市町村道などによって結ばれて、県内の30市町村が網の目のようにつながれ、和歌山県内の経済や文化の発展がはかられています。

一方、JR紀勢本線も特急くろしおや

\*1 有田 I Cと御坊 I C間是一般有料道路湯浅御坊道路とよばれている。

オーシャンアローが新大阪駅に乗り入れ、新幹線とつながりました。

## 港や空港の整備

港は船で旅行する人が乗降し、貨物の積みおろしをしたり、船が航海するのに必要な飲料・燃料・水などを補給したりする場所です。

和歌山下津港は和歌山北港区、本港区、和歌浦・海南港区、下津港区、有田港区の広い範囲にまたがる港湾で1965年々に特定重要港湾に指定されています。徳島港との間にフェリー航路が開設され、輸入木材や鉄鋼業、石油精製業などの企業の原材料を取り扱う物流拠点になっています。和歌山本港区では、1995年から韓国釜山港とを結ぶ定期コンテナ航路が開設され、カントリークレーンを備えた機能的な国際ターミナルの整備もできました。

1983年、重要港湾に指定された日高港では、塩屋地区に大型船が入港できる耐震性を強化した岸壁などを整備して2004年から使われるようになり、今では大型客船や外国貨物船も入港しています。

地方港湾の新宮港は紀南地方唯一の外国貿易を行うことができる港湾で、2004年に高野・熊野が世界遺産に登録されたことで、クルーズ船の寄港がふえています。

また県内で唯一の空港、南紀白浜空港は1968年に1,200mの滑走路をもつ県営空港として開港し、さらに1996年には、ジェット機の発着ができる空港となりました。2,000年には滑走路が2,000mに延長され、年間200日東京便が3往復運航されています。

1994年に開港した関西国際空港へはシャトルバスや鉄道によって結ばれ、和歌山県と世界の距離は一段と短くなりました。



高野龍神スカイライン



オーシャンアロー号



南紀白浜空港

\* 1 港のことを法律用語で港湾とよぶ。法律的には一般の港湾は港湾法で漁港は漁港法で規定されている。

\* 2 港湾は重要港湾と地方港湾とに分けられ、重要港湾のうち、特に国として必要と認めたものを特定重要港湾としている。(全国に23ある)なお、和歌山県の地方港湾は13ある。

# 第5章 現在の和歌山と将来



## 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

### 世界遺産の誕生

古代から奈良や京都に住む人々は、紀ノ川（吉野川）から南の紀伊山地全体を、神々がこもり仏が<sup>やど</sup>宿る<sup>せい</sup>聖域と考えるてきました。それは、紀伊山地が都から見て太陽の光が差す南の方角に太平洋に<sup>つ</sup>突き出た形で位置し、年間3,000mmに達する降雨が険しい山岳地形を形成して、人々が立ち入ることを容易に許さなかったうえ、山や岩、森や樹木、川や滝など、<sup>さんこうしん</sup>信仰心を呼び起こす<sup>とくちゆう</sup>特徴的な自然の景物に恵まれていたことによります。



2004（平成16）年7月7日、中国の蘇州で開かれたユネスコの第28回世界遺産委員会は、日本政府から推薦された文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を世界遺産に登録しました。この「紀伊山地の霊場と参詣道」は、紀伊山地でも特に信仰を集めた霊場「吉野・大峯」「熊野三山」「高野山」と、それらを結ぶ道である「大峯奥駈道」「熊野参詣道」「高野山町石道」及び周囲の「文化的景観」によって構成されており、その範囲は和歌山県を中心とし、広く奈良県や三重県にまで及んでいます。

ちなみに「文化的景観」とは、世界遺産委員会における評価が近年一段と高くなってきている領域の一つですが、わかりやすくいえば「人間の様々な営みと自然が一体となって形づくられた特別な意味のある景観」のことで、「紀伊山地の霊場と参詣道」の場合は、「山や森などの自然を神仏の宿る所とする信仰が形づくった景観」の代表例として、高く評価されています。

## 世界遺産の特徴

紀伊山地の3つの霊場は、それぞれ「修験道」「熊野信仰」「真言密教」という宗教の日本を代表する霊場で、その影響は京都を初め全国におよび、日本人の精神的・文化的な発展と交流に極めて重要な役割を果たしてきました。

そうした歴史を反映して「紀伊山地の霊場と参詣道」には、国宝4件、重要文化財23件の建造物をはじめ、史跡7件、史跡・名勝1件、名勝1件、名勝・天然記念物1件、天然記念物4件、合計41件にのぼる多種多様な文化財が含まれています。また、その範囲は495.3haと広大で、さらにその周囲に保護のために設けられた緩衝地帯11,370haを合わせると11,865.3haになります。また、川筋（熊野川）や海岸線（七里御浜）をも含む参詣道の総延長は307.6kmに達しています。

しかし、世界遺産に含まれる文化財の多さや面積の広さだけに意味があるというわけではありません。むしろ紀伊山地の神秘的な自然と信仰が一体となり、万物の生成を司る自然を神とし仏として畏れ敬う精神を表しているところが重要で、そのような特徴を備えた世界遺産は他にありません。

また、そうした精神が、日本古来の神々への信仰とインドから中国・朝鮮を介して日本に伝来した仏教を結びつけ、神と仏が一体となる「神仏習合」という日本固有の思想を生み出したことも、東アジアにおける文化交流の証しとして高く評価されています。



わかやまの知識



### 【ユネスコの「世界遺産」とは？】

世界遺産とは、その価値を平和で幸せな世界の構築に役立てるため、世界各国が力を合わせて保護していくことを決めた文化遺産や自然遺産、複合遺産のことです。

世界遺産に登録されるには、1972（昭和47）年にユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（略して世界遺産条約）にもとづき、毎年1回世界で開催される「世界遺産委員会」の厳しい審査に合格しなければなりません。その際、それぞれの国における評価だけでは不十分で、世界を見渡しての高い価値、すなわち「顕著な普遍的価値」を持つことが必要です。世界遺産を、災害や開発、観光公害などから守り、かけがえのない価値を未来へと確実に引き継ぐため、パリにある世界遺産センターを中心に、各国政府や県、市町村、地域の人々が手をつなぎ、保護のための真摯な努力が続けられています。

## 第5章 現在の和歌山と将来



## 天神崎の自然と保全活動～ナショナル・トラスト運動～



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

## 田辺湾の自然

紀伊半島の沖を流れる黒潮はその一部は潮岬から田辺の方に流れています。そのため、暖かい海の生物が和歌山県の海岸にも住み着き、田辺湾周辺の生物相は豊かです。

田辺湾には神島と島島があり、神島は昔ながらの森が茂る島として南方熊楠が大変大事にし、熊楠がこの島で昭和天皇を迎えて話をしたり、神島を国の天然記念物としたことはよく知られています。また、島島は、干潟があって京都大学臨海実験所の実習地として保護されています。

この田辺湾の入口の北側に天神崎という小さな岬があります。この岬の丘陵地は森で、その周辺には大変広くて平らな磯があります。景色もよく、自然が豊かなところで、古くから人々に親しまれ、田辺南部海岸県立自然公園の一部となっています。この海岸の森や、森に囲まれた湿地(水田の跡)、そして、磯にはいろいろな生物が住んでいます。特に磯では、暖かい海の生物が多く、子どもたちが自然に親しみながら遊べる安全な場所となっています。



天神崎の空撮(写真提供:田辺市役所)

## 天神崎の保全運動のおこり

1974年(昭和49年)、この海岸の森の一部に別荘が建設される計画が明らかになりました。別荘ができると森が少なくなり、森の生物だけでなく磯の生物にも影響が及ぶこととなります。当時、田辺商業高等学校(現在は、神島高等学校)にいた外山八郎先生がこの計画を知り、田辺市民に呼びかけて「天神崎の自然を大切にする会」をつくりました。そして、天神崎の森を残すことを願う市民の署名(16,000名)を集めて、田辺市長や和歌山県知事に要望活動を行いました。

しかし、県立自然公園であっても、県は別荘を作ることを止めることができないとの判断でした。メンバーは相談して、この自然を残すために、募金活動をしてこの土地を買い取ろうということになり、市民地主運動がはじまりました。はじめは、田辺市民や全国にいる田辺出身の方々に募金を呼びかけました。

## 土地の買い取り……ナショナル・トラスト運動

こういう運動は、イギリスでは既に100年も前からすすめられていて、ナショナル・トラストという運動と呼ばれていました。人々が寄付金を出して、そのお金で自然や歴史のある建物などを買い、いつまで

\* 1 第2編 第4章「南方熊楠と紀南地方」169ページ参照。

もみんなのものとして大事にしていこうというものです。天神崎の運動は、イギリスのナショナル・トラスト運動と同じことでした。この運動を成功させるために、大阪や東京など各地で募金活動を広めました。自然を残すために資金を集めて土地を買い取る運動はそこ日本では珍しかったので、新聞やテレビで取りあげられ、関心をもった人たちが音楽会などを催して募金活動を行ない、報道で知った人びとからも温かい寄付金が続々と送られてきました。全国の100校をこえる小学校からは、激励の手紙・寄せ書き・寄付金までもが届きました。

全国の人々からの支援金と、借金などで、別荘予定地は買い上げることができました。その後に和歌山県と田辺市もこの活動に協力して保全のために土地を買い取りました。

こうして、別荘予定地は保全地となり、さらに、天神崎の丘陵地の自然全体の保全を目指して募金活動を続け、買取り地（保全地）はだんだんと広がっています。



湿地（この周辺の山に別荘ができる予定だった）



潮だまり（タイドプール）で生きものを観察する子どもたち

## 自然を大切に

運動の初めの頃は大変な困難が続き、この自然を残すことは無理だとさえ言われました。募金などで本当に買い取ることができるのか、という大きな不安がありました。しかし、それ以外にこの自然を残す方法がないとの結論になったのです。その時、運動は「未来の子どもたちのために」このかけがえない自然を残そうということになったのです。

今、天神崎には多くの子どもたちや、各地から人々がよく訪れ、森、湿地、磯の生物に触れながら、自然や生命について学んでいます。生き物を見つけて喜んだり、驚いたり、興味深く観察しています。そうした学習を通じて、自然のしくみや、自然や生命の大切さを深く知る機会になっています。



第5章 現在の和歌山と将来



# 長期総合計画と地域づくり

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	

## 和歌山県の長期総合計画

和歌山県は、山の国そして海の国です。  
 和歌山県の自然の恵みを大切にして、産業の発展によって県民の所得を増やし、また福祉や教育、文化などの面で住みよい和歌山県をつくるため、長い期間を区切って目標を立て、さまざまな計画を実施していく「和歌山県長期総合計画」があります。

	計画する年	おもな目標(事業)
第1次	1963(昭和38)~1970	
第2次	1971(昭和46)~1975	豊かな郷土づくり(黒潮国体)
第3次	1976(昭和51)~1985	県民のしあわせと生きがいづくり(全国植樹祭)
第4次	1986(昭和61)~1996	活力と文化あふれるふるさとづくり(関西空港・近畿自動車道)
第5次	1997(平成9)~2007	ゆとりと充実、輝く和歌山新時代(南紀熊野体験博)
第6次	2008(平成20)~2017	未来に羽ばたく愛着ある郷土、元気な和歌山へ

この長期総合計画は、1963(昭和38)年からはじまり今は第6次計画が実施されています。

## 市町村合併

近年になって道路などの交通網の発達や自動車の普及、インターネットなどの整備で人びとの日常生活の範囲が今までの市町村の区域を越えて広がっています。また、それぞれの市町村の人口の減少や高齢化さらに市町村の財政もきびしくなってきました。そこで住民の生活をよくするために、より広い行政が必要になり2007(平成19)年に地方分権改革推進法ができ市町村合併が進められてきました。

和歌山県にあった50市町村(7市36町7村)も2008年には合併によって30市町村(9市20町1村)になっています。(平成の大合併)

## 公共交通の確保

南海電鉄 貴志川線はJR和歌山駅と貴志駅(紀の川市貴志川町)を結ぶ14.3kmの鉄道でした。沿線の人々も電車を利用することが少なくなって、電車を走らせている会社も経営が難しくなり廃線にすることを決めました。しかし、電車を利用しなければ通学や通勤できない沿線の人々は電車をずっとこのまま走らせてほしいという会を作り、署名活動をしたり、沿線の地図をつくって電車に乗ってもらうように勧めるなど運動を行いました。地域の人々の活動によって、和歌山県や関係の市がお金を援助して新しい会社が電車を走らせることになりました。



いちご電車  
 (Designed by Eiji Mitooka + Don Design Associates)

いちご電車やおもちゃ電車をつくって走らせる工夫をしたり、猫の「たま駅長」が全国的に知られるようになって

\* 1 第3編「昭和の合併と平成の合併」221ページの地図参照。

鉄道会社の利益も上がるようになり、沿線の人たちも電車を利用して通学、通勤ができています。

また、和歌山県内の各市町村ではコミュニティバスを走らせて住民が移動しやすいように便利をはかっています。

## 医療の充実

ドクターヘリは医師がヘリコプターに乗り込んで、救急現場に直行するヘリコプターのことです。2001年度から国が都道府県に補助金を出して全国に配備されることが決まりました。和歌山県では2002年度には和歌山県立医科大学にヘリコプターが配備されて、致命的なケガをした人や急病の人のもとにすぐに医師が行って手当てができるようになって、年間370件ほど出動しています。



ドクターヘリ

## 農業のとりくみ

近年の食品偽装表示や無登録農薬の問題などから、消費者の食物への安心・安全への関心が高まってきました。また、生産者の側にも地産地消への意識がめばえつつありました。そのような時代背景をふまえ、地元の農家の人たちが作った品物を直接売れる場所を提供できるようにした「市場」が開かれました。ここでは地元の消費者はもちろん、他府県の人たちが新鮮で安全な野菜や花卉などの買い物に訪れるようになってきています。

## 森林の保全

森林は和歌山県の貴重な財産です。その森林を守るために2002年から38の企業が参加して森の保全活動につとめている「企業の森」があります。2007年からは和歌山県独自に創設された「紀の国森づくり税」を利用して、「紀の国森づくり基金活用事業」が実施され、学校で林業の体験学習をしたり、会社の人たちが荒れた山に植林をするなどの活動をしています。

また、林業従事者も県の「林業雇用促進事業」により、約600人の若者層が採用されて、林業に取り組みはじめています。

## 過疎対策

人口が少なくなり、高齢化がすすんでいる地域を「過疎地域」とよびます。県内では、13市町村が指定されています。「過疎地域」は県内面積の約67%を占めており、総人口に対して22.3%の人が居住しています。また、山林の占める比率が高く、産業や生活環境の整備が、特に必要な地域を「振興山村地域」とよびます。和歌山県では17市町村65地域が指定されています。これらの地域では地震などの災害が起きたときに通信手段や道路網が遮断される恐れがあります。そこで県では孤立化する可能性のある21市町村の約750の集落に2009年度から無線機や衛星電話を配備することを決めました。

このように、「未来に羽ばたく元気な和歌山を」めざして和歌山県ではそれぞれの地域や分野でさまざまな取り組みが行われています。

## 第5章 現在の和歌山と将来



## 野球王国

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	

## 和歌山中学校の活躍

和歌山県の野球の歴史に大きな第一歩を記したのは、和歌山中学校（和中，桐蔭高校）の野球部の活躍です。1915（大正4）年8月，全国中等学校優勝野球大会の第1回大会が開かれると，和歌山県の予選を勝ち抜いて全国大会に出場しました。その後も，1928（昭和3）年の第14回大会まで連続して出場し，毎年「和中強し」といわれてきました。特に，1921年の第7回大会に，北島好次投手らが健闘して優勝旗を和歌山県に持ってきました。また，翌年の第8回大会も井口新次郎投手らのがんばりで連続優勝して県民を喜ばせました。

当時は現在のように専任の監督は置かず，ときどき大学生の先輩から指導を受ける程度で，主将がチームをまとめ，監督を務めました。そのため，主将の人がらと熱意が選手一同に大きな影響を与えました。

1924年4月に選抜大会もはじまり，1927年の第4回大会では，名投手小川正太郎の好投で優勝しました。小川は早稲田大学に進み，早慶戦で神宮球場へ試合を見にきた人々をわかせました。和中は，和歌山県の中等学校の野球をリードしてきました。



全国優勝旗をかこむ和歌山中学校（大正10年）

## 海草中学校の台頭

圧倒的な和中の強さに発奮して，「打倒和中」をかかげてがんばる学校もでてきました。海草中学校（向陽高校）や和歌山商業（県立和歌山商業高校）などです。猛練習で実力をつけ，1929年の夏には，海草中学校が和中を破って甲子園に初出場し，いきなり準優勝しました。

その後，しばらく和中・和商・海草の三校時代がつづきますが，1931年春ごろから海南中学校（海南高校）も追いつき，4校による対抗時代を迎えます。1933年春の選抜大会には，4校がそろって甲子園に出場するというすばらしい成果をなしとげます。

しかし，1927年春の和中の優勝以降，全国制覇からは遠ざかってしまいました。その沈黙を破ったのは，1939年夏の選手権大会での海草中学校の活躍でした。左腕島清一投手は，全試合で相手チームを完封



全国優勝の海草中学校（優勝旗をもつのは島投手）（昭和14年）

施要項から球技の種目が取り除かれ、県内の各校野球部は解散しました。戦局はますます激しくなり、島清一ら甲子園をわかせた多くの名選手も戦場で尊い命を落としました。

## 戦後の野球王国復活から現在

1945年ごろの和中グラウンドは、半分はさつまいも畑で、スタンドは防空壕、バックネットはないというありさまでした。また、校舎の半分が兵舎になっていました。このようなとき、1946年夏の選手権大会が復活されることが発表されました。食糧事情も悪く、野球どころではなかったのですが、各学校では、野球の好きな中学生は練習をはじめました。用具は先輩の残してくれたグローブをみんなで使い、破れたボールは全員で手分けしてぬい、折れたバットは釘で止めてテープを巻き、大切に使いました。みんな空腹に悩まされながらも全国大会への出場を夢見て、暗くなるまでボールを追い、グラウンドをかけ回りました。

都道府県の予選を勝ち抜いた全国大会への出場校は、食糧持参で集まりました。試合で敗れて郷里に帰るとき、相手校に残った食糧を贈って健闘を祈ったといいます。こうして球児たちの野球にかける熱い思いが後輩に引き継がれていきました。

学制改革により、1949年4月、中等学校の大会は高等学校野球大会と改められて続けられることになりました。この間、和歌山県の代表校も、先輩たちの残した輝かしい歴史を背負って、試合にいどみ、好試合を重ねましたが、なかなか全国優勝はできませんでした。

県民が待ち望んだ全国優勝は、箕島高校によって1970～79（昭和45～54）年の間に春の選抜大会で3回、夏の選手権大会で1回なしとげられました。なかでも1979年の第61回選手権大会における星稜高校（石川県）との延長18回に及ぶ息がつまるような熱戦は、全国の高校野球ファンを茶の間にくぎづけにした3時間50分の名勝負でした。この年箕島高校は春夏連続優勝を成しとげました。

その後は、智辯学園和歌山高校が全国優勝して「野球王国」の名を引きついでいます。また日高高校中津分校が1997（平成9）年の選抜大会に、全国で初めて分校として出場を果たしました。

し、なかでも準決勝の対島田商業（静岡県）戦と決勝の対下関商業（山口県）戦ではノーヒット・ノーランの快挙でした。海草中学校は、その次の1940年にも真田重蔵投手を盛り立てて2連覇しました。

1941年、アメリカ・イギリスとの開戦の危機も迫ってきたため、文部省は県外試合の禁止を発表し、全国大会も中止されることになりました。すでに各地で県予選がはじまっていたのですが、選手たちは泣きながらあきらめたといいます。

1943年、文部省の学徒体育訓練実

第5章 現在の和歌山と将来



# 和歌山を代表するスポーツ選手

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	

## 我が国スポーツ界の功労者

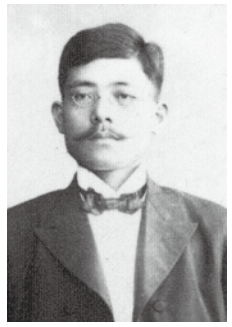
和田フレッド勇（1907～2001）は、アメリカ生まれの日系二世（フレッド・イサム・ワダ）で幼年期を御坊市で過ごしました。戦後、アメリカに遠征した日本選手団に自宅を宿舎として提供するなどの援助をしています。東京オリンピック招致委員に選ばれ、欧州や中南米の国々に東京開催の協力を求めて自費で巡り、1964（昭和39）年の第18回東京オリンピック競技大会の実現に大きく貢献しました。その他、多くの功績により国際オリンピック委員会（IOC）から「IOCトロフィー」が贈られました。御坊市初の名誉市民です。



和田フレッド勇

## 日本サッカーの創設者

中村覚之助（1878～1906）は、那智勝浦町出身で、1902（明治35）年東京高等師範学校（現筑波大学）に在学中、イギリスの「アソシエーション・フットボール」を訳しルール解説書をつくり、ア式蹴球部を立ち上げました。これが日本でのサッカー（当時はア式フットボールといった。）の始まりです。（財）日本サッカー協会のシンボルマークは、日本にサッカーを紹介し普及に尽力し、29才の若さで急逝した氏の故郷熊野の霊鳥「八咫鳥」を図案化したものといわれています。



中村覚之助

## 日本人女性初の金メダリスト

兵藤秀子（旧姓：前畑 1914～1995）は、橋本市出身で、第10回ロサンゼルスオリンピック競技大会（1932年）で銀メダルを獲得し、次の第11回ベルリンオリンピック競技大会（1936年）の水泳競技200m平泳ぎで金メダルを獲得しました。その時のラジオ実況放送「前畑ガンバレ」の絶叫アナウンスに日本中が熱狂し、今も語り草となっています。引退後は、日本最初の「ママさん水泳教室」や「中高年水泳教室」を開くなど生涯を水泳の指導、普及に尽くしました。アメリカの水泳殿堂入りを果たし、オリンピック功労賞を受賞。1990（平成2）年には女性スポーツ界初の文化功労者となりました。



兵藤秀子

## 友情のメダル

西田修平（1910～1997）は、那智勝浦町出身で、第10回ロサンゼルスオリンピック競技大会（1932年）と第11回ベルリンオリンピック競技大会（1936年）で銀メダルを獲得しました。特に、ベルリン大会で

はアメリカの選手と堂々とわたりあい5時間を超える戦いの末、同記録の大江選手と2位、3位を分け合いました。この時の銀と銅のメダルを半分ずつ合わせた「友情のメダル」の話は人々に感動を与え、教科書でも紹介されました。その後も、(財)日本オリンピック委員会(JOC)委員や第18回東京オリンピック競技大会の陸上競技審判長など数多くの要職を務め、日本のスポーツ振興に力を尽くしました。1988年に那智勝浦町から名誉町民の称号が贈られています。



西田修平

## 体操ニッポンを支える郷土の先輩

早田卓次は、1940年田辺市で生まれ、第18回東京オリンピック競技大会(1964年)の体操競技において、日本男子チームの団体総合優勝の原動力となり、個人種目「つり輪」でも金メダルを獲得しました。その後も多くの国際競技大会に出場し、日本代表として活躍しました。引退後は、日本代表チームのコーチや団長として後進の指導にあたり世界の舞台で活躍する競技者を育てています。現在も、(財)日本オリンピック委員会(JOC)や日本ユニバーシアード委員会委員長などの要職にあり、体操競技をはじめ、広くスポーツの振興と発展に尽くしています。



早田卓次



わかやまの知識



【国民体育大会(国体)】

### 国体とは

国体は、都道府県持ち回りで、毎年開催されている国内最大かつ最高の国民スポーツの祭典です。

法令に明記された大会で、スポーツ振興法第6条には、「国民体育大会は、財団法人日本体育協会、国及び開催地の都道府県が共同して開催する。」とあります。

「本大会」「冬季大会」の競技の得点の合計を競う都道府県対抗方式で行われ、天皇杯(男女総合成績第1位)・皇后杯(女子総合成績第1位)の獲得をめざし、都道府県代表の選手が熱い戦いを繰り広げます。

国体の目的は、広く国民の間にスポーツを普及し、スポーツ精神を高揚して国民の健康増進と体力向上を図り、併せて地方スポーツの振興と地方文化の発達に寄与するとともに、国民生活を明るく豊かにしようとするものです。

### 和歌山県での国体

和歌山県は、1971(昭和46)年に「黒潮国体」と名付けた第26回国民体育大会を開催し、男女総合成績(天皇杯)で優勝を果たすとともに、女子総合成績(皇后杯)でも第2位を収めました。県内各地で繰り広げられた花いっぱい運動や選手のホームステイ(民泊)、ブラジル日系選手の特別参加など、工夫をこらした取り組みは、参加者から大変好評でありました。国体後には、県民総参加スポーツ大会が始まり、県内でもスポーツ活動が盛んになりました。

2015(平成27)年には、44年ぶりに和歌山県において第70回国民体育大会を開催する予定です。和歌山を元気にする国体の実現をめざして、現在、県民の皆様方や市町村、競技団体とともに準備を進めています。

第5章 現在の和歌山と将来

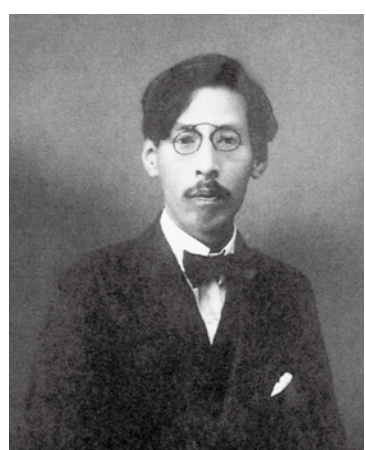


時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	

# 紀州と近代文学

## 佐藤春夫から中上健次へ

紀州の文学を考えると、文化的な面からも人情的な面からも、紀北と紀南という分類ができるようです。紀南では、新宮から佐藤春夫（1892～1964）と中上健次（1946～1992）という、二人の優れた文学者が出ています。



佐藤春夫



中上健次

佐藤春夫は、1917（大正6）年に『西班牙犬の家』『病める薔薇』を発表し、新進作家の地位をうちたてました。『病める薔薇』を書き改めた『田園の憂鬱』は、大正時代を代表する作品になりました。細やかな感情を文語詩でうたいあげた『殉情詩集』や評論『退屈読本』などの作品でも高く評価されました。また、『車塵集』などの漢詩の翻訳、『晶子曼陀羅』などの伝記物でも多くの作品を残しています。晩年は、『わんぱく時代』や『望郷の賦』など、故郷を題材にした作品も目立つようになりました。

中上健次は、1975（昭和50）年29歳のとき、『岬』という作品で第74回芥川賞を受賞しました。その後、『枯木灘』『地の果て 至上の時』など、熊野の風土と「物語」にこだわりつづけた作品を次々と発表して、たちまち新しい文学の担い手と認められました。また紀伊半島をめぐる作品『紀州 木の国・根の国物語』に代表されるように、多くの優れたエッセイも残しています。晩年、地元新宮で自主的な講座である「熊野大学」をおこし、熊野の復興に力を尽くすとともに、広く世界にアピールできる文学を目指しました。

さらに、新宮との関わりで言えば、日高郡日高川町出身の沖野岩三郎（1876～1956）は、新宮での「大逆事件」の体験を『宿命』という作品などに描いて注目され、児童文学にも活躍しました。東くめ（1877～1969）は「鳩ぽっぽ」など、今でも歌い継がれている多くの童謡を作詞し、西村伊作（1884～1963）は東京に文化学院を開校し、西欧的な生活や住宅、新しい教育の問題などに独特な考えを大正時代に著述しました。両人も、新宮出身です。

## 紀北出身の人々

第二次世界大戦後の文学を「戦後文学」といいます。それを代表する大岡昇平（1909～1988）は、東京生まれですが、両親は和歌山市出身でした。『野火』や『レイテ戦記』などの代表作とともに、『帰郷』

\* 1 文章の内容を他の国の文章になおすこと。

という作品もあります。

和歌山市出身の<sup>ありよしさわ こ</sup>有吉佐和子（1931～1984）は、<sup>ぶんだん</sup>文壇登場作「<sup>じうた</sup>地唄」にみられるように伝統的な芸能への関心が強く、自らの家系を通して世代間の考え方の対立を描いた『紀ノ川』は代表作です。和歌山県の川を題名にした『有田川』『日高川』などもあります。また、『<sup>はなおかせいしゅう つま</sup>華岡青洲の妻』のモデルも、紀州ゆかりの女性です。『<sup>こうこつ</sup>恍惚の人』『<sup>ふくごう おせん</sup>複合汚染』など、現代社会のかかえる問題をとらえ、当時の流行語となるほど大きな反響をよびました。



有吉佐和子

すさみ町生まれ和歌山市育ちの<sup>じょうなつ こ</sup>城夏子（1902～1995）は、少女小説集『<sup>ばら こみち</sup>薔薇の小径』で注目され、感情を素直にのべた小説『<sup>すなお まり</sup>毬をつく女』などの代表作があります。

海南市出身の<sup>たぎしげ</sup>田木繁（1907～1995）は、プロレタリア詩人として人々の生きる姿を描いた『<sup>きかく</sup>機械詩集』などを発表しました。

## 地元での活動

紀州方言を用いた『馬』という作品などで劇作家として知られた<sup>さかなかまさ お</sup>阪中正夫（1907～1998）は紀の川市の出身です。阪中のまわりに集まった人々は、<sup>そうかん</sup>機関誌『<sup>きい</sup>紀伊詩人』を創刊して、大正期から昭和初期にかけて全国的に農民たちの詩の運動を大きく盛り上げました。

1931年<sup>いぼつし</sup>猪場毅によって和歌山市で創刊された『<sup>たにざまじゆんいちろう</sup>南紀芸術』には、<sup>いぶせます じ</sup>谷崎潤一郎・<sup>いぶせます じ</sup>佐藤春夫・<sup>いぶせます じ</sup>井伏鱒二ら当時を代表する文学者にまじって、<sup>きんほく</sup>紀北と<sup>きなん</sup>紀南の作家たちも多く<sup>きこう</sup>寄稿しています。<sup>みなみゆき お</sup>南幸夫（1896～1964）もその一人ですが、南は東京で『<sup>ぶんげいしゆんじゅう</sup>文芸春秋』の創刊にかかわっています。やがて故郷に帰って、<sup>き たむらすむ</sup>喜多村進（1889～1958）などと地方文化の向上に<sup>こうけん</sup>貢献しました。



わかやまの知識



【紀州の方言】

紀州で、人も無生物と同じように「ある」と表現するのを知って驚く人もいます。しかし、<sup>みやび</sup>雅の文学といわれる『<sup>いせ</sup>伊勢物語』にも「昔、男ありけり」ではじまっていますから、<sup>へいあん</sup>平安時代の用法が残っているといっ

てよいかもしれません。  
和歌山県のあちこちに古語が残されていますが、この「ある」の用法もその名残の一つといえます。特に古い語法の残ったものとして「落ちる」を「<sup>お</sup>落つる」、「逃げる」を「<sup>へい</sup>逃ぐる」というような使用があり、日高郡や西牟婁郡の山間地では、今も使われています。また日高地方に残されている「日高の馬はこくるほど<sup>か</sup>駆くる」というしゃれた表現があります。馬がころぼほどによく駆けるということです。

何ととっても紀州方言の特色をあらわしているのは、「ノシ」、「ヨシ」の文末のことばの使い方でしょう。ものごとを早くさせようと相手を促す時の「はよせーソー」にしても、新宮方言の「そうですか」の意の「<sup>そー</sup>そーカン」にしても注目すべき文末のことばの例ですが、<sup>けいご</sup>敬語表現としての「ノシ」には、言うに言われぬ良さがあり、「ええ天気やノシ」、「そうよノシ」と挨拶したり、<sup>あいさつ</sup>相槌を打つのは多く女性ですが、紀州人のもつ温かみと品の良さが伝わってきます。また、「・・・しヨシ」、「そうヨシ」など、「ヨシ」には敬意はあまり含まれていないといわれますが、「シ」の音に含まれる母音「イ」のすずしさが独特の味わいを与えてくれます。



## 第5章 現在の和歌山と将来



## 和歌山が生んだ美術家たち

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

日本に古くからある美術としては、<sup>すいぼくが</sup>水墨画や<sup>うきよえ</sup>浮世絵、あるいは<sup>ぶつぞう</sup>仏像などが思い出されるでしょう。日本の近代のはじまりである明治という時代は、こうした古くからあった美術のかたちが、大きく変化した時代でした。江戸時代の終わりに<sup>さこく</sup>鎖国が解かれると、西洋の技術や学問が<sup>こ</sup>いっせいに流れ込みましたが、美術の分野でも<sup>あぶらえ</sup>油絵のように、それまでの日本になかった新しい技法<sup>ぎほう</sup>が伝わってきたのです。

ここでは、明治時代以後に活躍した、和歌山ゆかりの美術家たちを紹介していきます。

## 油絵を学んだ人たち

日本で最も早く油絵を学んだ女性画家の一人が<sup>じんなかいとこ</sup>神中糸子(1860～1943 和歌山市出身)です。1876(明治9)年にできた<sup>こうぶ</sup>工部美術学校という日本最初の美術学校で、イタリア人画家フォンタネージから油絵の指導を受けました。当時の油絵は、現実の風景をありのままに<sup>えが</sup>描き写すための技術として、今日の写真と同じ役割<sup>に</sup>を担っていました。しかし、やがて明治から大正へと時代が移るころには、画家たちは自分が感じたことや心にうかんだ世界を、絵によって表現するようになっていきます。



神中糸子 作《海岸風景》(1890年)

そしてこの時代、和歌山からも個性的な画家たちが次々と育っていきました。

力強い筆使いで、南紀の風景を描きつづけた<sup>はらかつしろう</sup>原勝四郎(1886～1964 田辺市出身)。大正時代にフランスに渡り、さまざまな新しい表現方法を学んで帰った<sup>かわぐちきがい</sup>川口軌外(1892～1966 有田川町出身)。少年期を<sup>しんぐう</sup>新宮市で過ごした後、同じくフランスで最新の美術に触れ、戦前戦後を通じて日本の<sup>ちゆうしやう</sup>抽象美術の中心的な画家となった<sup>むらいまさなり</sup>村井正誠(1905～1999 岐阜県出身)。彼らは、西洋の新しい美術を積極的に<sup>きゆうしゆう</sup>吸収した人たちです。



川口軌外 作《少女と貝殻》(1934年)

一方、和歌山県出身の両親をもつ<sup>きのしたたかのり</sup>木下孝則(1894～1973 東京都出身)、<sup>きのしたよしのり</sup>木下義謙(1898～1996 東京都出身)の兄弟は、同じくフランスで、<sup>でんとう</sup>伝統的な油絵がもつ、しっかりと<sup>びやうしや</sup>描写法を<sup>しゅうとく</sup>修得し、<sup>しやじつ</sup>写実的な作品を描きつづけました。

## 個性的な版画家、日本画家たち

大正という時代は、明治と昭和という二つの戦争の時代にはさまれて、比較的自由な時代でした。若者たちが芸術や生きる意味などについて深く考えた時代ともいえるでしょう。

<sup>たなかきよきち</sup>田中恭吉(1892～1915 和歌山市出身)は、青春時代の<sup>なや</sup>悩める心を<sup>もくはんが</sup>木版画を通して表現し、自らの病と



田中恭吉作《焦心》  
(1914年)

真正面に向き合いながら、短い生涯を美術にささげた画家でした。父親が橋本市出身の恩地孝四郎（1891～1955 東京都出身）は、田中とともに美術に取り組み、のちに日本の版画界の指導者となりました。また、逸見亨（1895～1944 和歌山市出身）は、その田中の作品に感銘を受け、独自の版画を制作しました。

日本画という、古くからある美術の分野でも、この時期、才能ある画家たちが登場します。伝統的な日本の美と西洋美術の近代的な表現とを組み合わせ、新しい日本画を創り出した下村観山（1873～1930 和歌山市出身）。床の間の装飾品としてではなく、広い会場で見られる美術作品として、力強い大作の日本画を描いた川端龍子（1885～1966 和歌山市出身）。そして、西洋美術の手法を積極的に取り入れながら、日本画の枠にとらわれない実験的な作品を試みた野長瀬晩花（1889～1964 田辺市出身）など、個性あふれる画家たちです。



野長瀬晩花作《島の女》  
(1916年頃)

## アメリカに渡った画家たち

和歌山県は、かつて移民県として全国的にも有名な県でした。明治初期から何万人もの人たちが出稼ぎ移民として、船でハワイや北米、南米にまで仕事を求めて渡っていきました。こうした異国の地で、厳しい生活をしてきた人たちの中からも、すぐれた画家が生まれています。石垣栄太郎（1893～1958 太地町出身）、ヘンリー杉本（1900～1990 和歌山市出身）、浜地清松（1885～1947 串本町出身）、そして高井貞二（1911～1986 大阪市出身 高野口小学校・伊都中学校卒業）らです。彼らはみなアメリカでさまざまな差別や偏見と闘いながら、絵を通して自らの信念を主張し、画家として認められた人たちです。



石垣栄太郎作《キューバ島の反乱》  
(1933年)

## 彫刻家と戦後の作家たち

彫刻家としては、確かな技術で生命感あふれる人体像をつくりつづけた建畠大夢（1880～1942 清水町出身）と、フランスの巨匠ブールデルに学んだ保田龍門（1891～1965 紀の川市出身）という、日本の近代彫刻を代表する二人の名前を挙げるすることができます。また建畠覚造（1919～2006 建畠大夢の長男）は、日本の抽象彫刻の先駆者として活躍しました。版画家としては、浜口陽三（1909～2000 広川町出身）がカラーメゾチント技法の開拓をおこない、数々の名作を生み出しました。

このように和歌山県からは多くの優れた美術家が生まれています。



浜口陽三作《パリの屋根》(1956年)

\* 1 浜口梧陵のひ孫。第2編 第3章「安政の大地震と浜口梧陵」158ページ参照。